



福田恒存全集

江苏工业学院图书馆  
藏书章

第八卷

福田恆存全集 第八卷

昭和六十三年七月一日第一刷發行

定價五千五百圓

著者 福田恆存

發行者 西永達夫

發行所 株式會社 文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三ノ二十三  
郵便番號一〇二  
電話東京(03)三五一三(六代表)

印刷所 精興社

製本所 加藤製本

製函所 加藤製函

©TSUNEARI FUKUDA 1988

萬一、落丁、亂丁の場合はお取替いたします

ISBN 4-16-363420-7

Printed in Japan

# 目次

明智光秀	347
一族再會	327
明暗	239
龍を撫でた男	177
堅壘奪取	151
キティ颯風	69
II	
ホレイショー日記	9
I	

有間皇子

397

億萬長者夫人

459

解つてたまるか！

533

總統いまだ死せず

613

III

蘇我馬子の陰謀

673

大化改新

707

初演記録

741

全収録作品題名索引

755



福田恆存全集 第八卷



裝釘  
柴永文夫

題簽  
田中眞洲

I



ホ  
レ  
イ  
シ  
ョ  
ー  
日  
記



二年ばかり前——いや、かつきり二年になる——日もおなじけふだつた。それでけさベッドのなかで憶ひだしたのだ。その日の夕方、わたしはコヴェントリ・ストリートのスコッツでミシエル・ペリエに會ふ約束がしてあつた。

かれは大層機嫌がよく、この店自慢の海老料理を賞味しながら、よく飲み、よく話した。わたしはもつぱら聴き役にまはつた。だが、かれはいはゆる陽氣なたちといふのではなく、無駄話が好きなだけで、それもただ重くるしい話が二人の間に落ちてくるのを押しつけるためといふふうなのだ。かつてのわたしがさうだつた。が、その頃のわたしは、さういふ配慮が面倒になつてゐたばかりでなく、その役割をいまはペリエが買つてくれてゐた。わたしは深々と椅子に腰をおろし、微笑を浮べながら、相手の話を聴いてゐればよかつたのだ。それに話題は、わたしたちの「ハムレット」についてであり、この有名なフランスの劇評家はそれを観るために二三日前からロンドンにやつてきてゐたのだ。わたしはその演出をしてゐたし、そのなかでいつものやうにホレイシヨ―役を演じてゐた。

ペリエはわたしの演出について當らず觸らざることを持ちよつとしやべつたきりで、あとはフランスの俳優たちにつ

いて機智にとんだゴシップを次から次へとしやべり續けた。劇評は、いづれパリへかへつてから、「ゆつくり考へたうへで」書かせてもらふといふのだ。わたしもその方が氣が樂で、あへてその場でかれの率直な意見を訊いてみようともしなかつた。無駄話に續く無駄話——聴いてゐれば、それなりにおもしろいのだが、聴いてゐなくてもよかつた。わたしは氣の向いた時にだけ耳を傾ける。なにかについて相手の意見を訊き確めるなどといふやぼなことは、かれは絶対にしつこない。わたしはかれのネクタイの結び目を見つめながら、まつたくほかのことを考へてゐた。いや、考へてなごゐなかつた。こんな時ほど、わたしたちがなにも考へずにゐられる時はないのだ。あらゆる約束や行動の脈絡から解きはなたれて、まつたく一人で爐ばたに腰をおろしてゐる時だつて、これほど自由ではない。過去の追憶や未來の想念が、むしろこの時とばかり、わたしの脳裡に入りこんでくる。が、いまは、ペリエのおしやべりがそれらの邪魔ものの侵入を一手にふせいでゐてくれるのだ。わたしは本當に居心地よく、椅子の背にもたれたまま、時々グラスを唇にあてて、舌のさきをちよびりと黄いろい液體につけてみたりしてゐた。

この自己喪失のひそかな快樂は、突然、ペリエの高笑ひによつて破られた——

「はゝゝゝ、あながち氣のせるでもないでせう——ネ・

ス・バ？」

かれはわざと最後の言葉をフランス語でいつた。わたしはあわてずに坐りなほしながら、曖昧な表情で調子を合せた。

「光線のせりでもないとおもふんだ。玉座をじつと見つめてゐるホレイシヨ一の眼ですがね——かうして柱に右手をかけ、寄り掛るやうに上半身を前のめりにして、クロードイアスとガートルードを睨みつけてゐるあなたの眼には、妙に邪惡の影がありましたよ。あれはサタンの眼光だ——決して、ハムレットの誠實なる學友、ホレイシヨ一のそれぢやない。」

わたしは内心たじろいだ。自由闊達な會話といふものは、往々にして話し手自身も氣づいてゐないやうな眞實をはじきだしてくるものだ。わたしは一瞬たじろいだけれども、相手の言葉にいささかの成心もないことはわかつてゐた。わかつてはゐるが、それでも首に血がのぼつてくるのをどうしやうもなかつた。わたしはへまな答をしてしまつた。

「睨みつければ、邪惡な影もやどりますよ。」

ペリエはますます邪氣なささうに笑ふばかりだつた。しかし、わたしの方は、多少アルコールがはひつてゐたにせよ、赤面は相手に氣づかれてしまつたかもしれないし、そのうへ明らかに間のぬけた返答をしてしまつたといふ自覺のため、もはやごまかしのつかぬほど兩頬を眞赤にしてし

まつたのだが、さらにその自覺が——おそらく相手はなぜ赤面したかわからぬだらうといふ氣遣ひとともに——重ね重ねわたしのうちに混亂をひきおこしていつたのである。わたしは事態の馬鹿らしさに業をにやししながら、切り返すやうにかういつた——

「それで、そのことが俳優としてのわたしの才能と本質的な關りがあるといふわけなんですな。」

「え、それはまた一體どういふことです。」

ペリエは面くらつたやうだつた。さうだ、かれはなにもそんな仰々しい、開きなほつた問題に觸れるつもりではなかつたのだ。かれは初めから重くるしい話題を避けてゐたではないか。わたしはさういふかれの話しぶりに、すつかりいい氣になつて憎眠をむさぼつてゐたはずなのに、いつの間にかみづから火中に身を投ずるやうな愚を冒してしまつた。

いま憶ひだせば、まつたく馬鹿らしいことだ。あのフランス人は完全に無心だつた。その證據に——わたしの狼狽をあの時はちよつと奇妙におもつたかもしれないが——そのあとに續けられた二人の會話は、かれの心の隅にかすかに結ばれたであらうそのこだはりを、おそらくきれいに跡形もなく拂拭してしまつたにちがひないから。そして、それは、わたしが自分のおもひをなにか外面的な事件に託し

て表明してしまふやうなへまなまねをやりさへしななければ、  
かれの意識に生涯二度と浮びあがつてはこぬほど微細な痕  
跡しか残してゐないのだ。勿論、わたしはそんなへまはや  
らぬ——いや、できないのだ。

それにしても實に業腹だ。といふのは、たとへかすかに  
もせよ、かれの眼に自分の心の動きを見せてしまつたから  
ではなく、あの時——二年前のあの時——自分といふ人間  
の正體を限なく見抜く機會を與へられたからなのだ。しか  
もその機會をひとから與へられた——初めて會つた、そし  
ておそらくふたたび遭ふこともあるまい他國人に。かれに  
とつてはなんでもないこと、かれの心のうちからは永遠に  
消え去つてしまひ、たとへあの日の場面がなくなるともかれ  
の生涯の歴史はなんの變化も蒙らなかつたであらうことが、  
この現在のわたしをつくる決定的な要因になつてしまつた  
のだ。それが業腹だといふのだ。いや、業腹だといふのは  
うそだ。ただ、さういつてみただけだ。あの偶然がなくと  
も、やつぱりわたしはわたし自身の足で、けふの日まで歩  
いてきたことだらう。事實、さうしたのもおなじことだ。  
なぜなら、わたしは、その偶然はペリエがわたしに與へて  
くれたものだといふことを、當のペリエにはもちろん、そ  
の他のなんびとも氣づかせはしなかつた。變ないひかた  
だが、自分自身にだつて氣づかせはしなかつた。わたしは  
あの日以来、徐々に變化しつつかあるのだが、その變化をひ

とに氣づかれるやうなことはもちろん、自分自身がその變  
化をみとめ、そのために生活が變調を見せることをみづか  
らかたく禁じてゐるのだ。

確かにあのとき以來、わたしはわたし自身の存在のしか  
たといふものを——いはば外界とのわたしの關係を——は  
つきり見抜いてしまつた。わたしのやうに、生れてからい  
つも自分の身ぶりばかり眺めて暮してきた人間が、自己の  
存在の本質的なありかたを、他人が洩した偶然の言葉をき  
つかけにして思ひ知らされたといふのはまことにアイロニ  
カルだといへよう。だが、事實はさうだつた。そして——  
そんなものかもしれぬ。わたしはあれ以來、本當に變りつ  
つある。すつかり變つてしまつた。しかし、わたしは依然  
として、「歴史ある」オールド・ヴィック座の「一流演出  
家」であり、「名譽ある」ギャリック・クラブの會員であ  
り、善良なるロンドン市民、身だしなみよき紳士、デイヴ  
ィッド・ジョーンズ氏である——この十年來、わたしは少  
しも變つてはをらぬ。

「はゝゝゝゝ、なにをいつてるんです。かつてハムレット  
役では世界に名聲をはせたオールド・ヴィックのデイヴィ  
ッド・ジョーンズ氏、いまさらあなたの才能を問題にする  
やつがありますか。」

ふたたびペリエの聲が耳をうつてきた——あゝ、さうと



られてはたまらぬ、おれが自分の人氣を氣にやんでゐるでもおもつてゐるのか、話がさう俗つぼくなつてきてはやりきれぬ、わたしはますます當惑した。にもかかはらず、わたしの相好はにやにやとくづれてゆく。わたしは「やさがる」よりほかに手はないとさつた。その方がいい、その方がいい、これであまく話は協道に逸れてゆくだらう——わたしは觀念した。

「それに、あなたのホレイシヨールときたら……。さう、ぼくは前から考へてゐたんですがね、さすがのシェイクスピアもホレイシヨールは書けてゐない。まさか狂言まはしのためにあの人物を登場させたわけでもないでせうが……。しかしさういふ氣味あひがないでもない。だつて、あの芝居のなかで、ホレイシヨールはなんにもしてゐませんからね——が、あれがゐないと困るんだ。」

ペリエは最後の言葉を、肩をがくりとおとし、吐息とともに投げ捨てるやうにしていつた。そしてその言葉がさらに激しくわたしのおもてを打つた——話は協道に逸れてゆくどころか、真正面からわたしの眉間に打ちこまれてきたのだ。

「ホレイシヨールは劇の進行係にして口上役——ハムレットの解説者——といふよりは、ハムレットの内心を外界になく紐帯、通路の役割みたいなものです。」

「けだし卓見だとおもひますね。」

わたしは自分の藏に火がついてゐるのを感じながら、しかし實際その意見はおもしろいとおもつたので、さう口をはさんだ。ペリエの話はわたしの合槌を得て、いよいよ活氣づいた。

「ホレイシヨールの常識の衣を着せてやらなければ、ハムレットの無念は永遠に世間に通じやしないんだ……。」

ペリエはふたたび「ネ・ス・パ」をくりかへし、かれの言葉の意味がわたしに正確に理解されたいのを見てとるや、さらに語をついだ。

「ホレイシヨールは常識人です。あなたがたイギリスのジェントルマンです。常識人は行動しやしない、なんにもしはせんです。いや、いや、さういふ意味ぢやない……。行動しますよ、むしろ行動ばかりする。だが、事件はおこさないと動しないのとおなじことなんです。不服さうです……。ぼくはなにもイギリス紳士を輕蔑してゐるんぢやありません。むしろ尊敬してゐるくらゐだ。けれどもですよ、規格どほりの行動しやしない人間は——少くとも——芝居の登場人物には向かないんだ。少くとも、主役には向きませんよ。ホレイシヨールといふやつはさういふ人物です。いかにシェイクスピアの才腕をもつてしても、あれだけしか書けなかつた。といふのは、役者にとつて、やりがひのない役だといふことになりませんか。」